

だって私は吃音症だから

出雲市立向陽中学校 二年 來海有笑

「話す」それは誰もが毎日していることです。人は言葉を交わします。「話す」ことを通して他の人と楽しんだり、笑ったりすることができます。

しかし私は普通に話せません。だって私は吃音症だから。吃音症を持っているため、スムーズに言葉が出ません。私は五歳くらいの時から吃音の症状がみられるようになりました。最初のほうは自分も周りの人も気にしていませんでしたが、小学校に入学すると、同級生や上の学年の人から笑われたり、話し方を真似してからかわれたりするようになりました。周りの人が私の話し方を気にするようになると自分自身も気にするようになりました。それからは、いろいろな面で辛い思いをしました。日直の日には、うまく話せないたびに顔が赤くなり体が熱くなりました。自己紹介では名前の最初の一文字が出ず、私一人だけ時間がかかりました。授業中、教科書の一文読みの順番が来ると手汗で鉛筆が持てなくなりました。学習発表会ではうまく言えない自分を見た人にどう思われたか不安で怖くなり、学校に行けなくなった時がありました。小学校の頃に受けたからかいの言葉は、その時だけでなく、私の心の中に強く焼きつき、私は話すことに恐怖を抱くようになっていました。

そんな毎日が続く中で、あるとき母は

「悪口を言うために話す人より、自分の気持ちを頑張って伝えようとする人のほうがよっぽど話す価値がある。」

と私に話してくれました。当時はこの言葉の意味がよくわかりませんでした。しかしこの時母に言ってもらえたことで「どんな時でも母は私の味方である」という安心感を持てるようになりました。どれだけ辛くても母は私を理解し、応援をしてくれると思えるようになりました。そんな母の存在は私の考えを少しずつ変えてくれました。あの時かけてもらった言葉の意味も考え、自分を変えようという気持ちを持てるようになりました。

中学生となり、新しい仲間たちとの出会いがありました。入学式は、不安のほうが大きかったのですが、少しずつ頑張ろうと思っていたことを覚えています。これまでの私であれば、「吃音を持っているからできない」と決めつけていたことも、「吃音を持っているけど工夫してやってみよう」と考えて生活するようになりました。このように自分の考えを変えて行動していくと、周りの人の反応も小学生の頃とは違っていることに気がつきました。特にクラスの皆から、からかわれることがなくなりました。日直の日や授業での一文読みなど、皆の前で話すことにはまだ緊張しますが、担任の先生や教科担当の先生のサポートで前よりも安心して話せるようになりました。今はゆっくりでも自分の伝えたいことは、自分の口から伝えたいと思っています。今の私はあの時の母の言葉の意味がよくわかります。

私は吃音を持っていることでのいろいろなことを考えさせられ、気づくことができました。

まず、人が心に負った傷は一生残るかもしれないということです。このように思うのは実際に今現在の私の心にも傷が残っているからです。そしてその言葉が私の心に焼きついた

瞬間の痛みは残ったままです。あの時、あの場所、あの人から放たれた言葉。一度負った心の傷は癒えにくいものだとことを実感しています。だから誰もがこのことを心に留めて生活していくことはとても大切なことだと思います。

次に、支えてくれる存在の大きさです。家族は私がどんなにうまく言えなくても必ず言い終わるまで待ってくれました。辛い思いをした時は、母と同じように優しく声をかけてくれました。中学生になって親友ができました。その人には初めて私から吃音のことを話しました。私の思いをしっかりと受け止めてくれました。私は家族という支えのおかげで前向きになり、そして勇気を出して行動したことで親友という新たな支えと出会うことができたのです。支えのおかげで、私は楽しく生きることができるようになりました。

これからも辛いことはあるかもしれませんが、私は自分から人を傷つけるような言葉は言わないようにしたいと強く思っています。そして私が支えられたように、私自身が誰かの支えになっていきたいと思います。傷つき傷つけられることの重さを知り、支えの大きさを私は知ったからです。だって私は吃音症だから。